



労働保険ノ創設力, 工場法ノ勵行力(1)

瀧谷, 善一

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 24(6):805-820

(Issue Date)

1918-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052891>



勞働保險ノ創設カ、工場法ノ勵行カ（其二）

神戸高等商業學校教授

商學士 瀧谷 善 一

衆議院ハ本年三月、代議士上村耕作君外一名提出ノ勞働保險法制定ニ關スル建議案ヲ可決セリ。而シテ政府委員ハ同建議案ノ委員會ニ於テ、來年度豫算ニ勞働保險調査費ヲ計上スベキコトヲ言明セリト傳ヘラル。斯クテ從來、學者、政治家ニ依リテ屢論議セラレタル勞働保險ハ漸ク實際問題トシテ取扱ハレントスルノ徵候ヲ示シ來レリ。

惟フニ勞働保險ノ社會政策上必要ナル施設タルコトハ多クノ人ノ等シク認ムル所ナルベキモ、其制度ノ組織、内容及ビ實施ノ時期ニツキテハ著シキ議論ノ相違ヲ見ルナルベシ。殊ニ勞働保險實施ノ時期ニ關シテハ各種ノ方面ヨリ、各様ノ異論ヲ生ズルコト想像スルニ難カラズ。其議論ノ一ハ勞働保險制度實施以前ニ社會政策上、猶他ニ實施スベキ一層緊急ナル施設ナキヤニ在ルベク、而シテ此問題ノ焦點ハ具體

的ニハ勞働保險ニ依ル事後ノ救濟ヨリハ疾病、傷害ノ豫防ノ方緊切ナラズヤトノ點ニアルベシ。

勞働保險ノ創設カ、工場法ノ勵行(並ニ一般衛生設備ノ改善)カ。此問題ハ數年前英國ニ於テ、勞働保險制度ヲ立テントセルトキ、論議セラレタルコトアリ。又現ニ米國ニ於テ、疾病保險制度ヲ立テントスル運動ニ關聯シテ、盛ニ論議セラレツ、アル所ナリ。我ガ社會政策學會ニ於テモ、亦嘗テ、勞働保險問題ヲ討議シタル際、此點ニツキ議論ヲ生ジタルコトアリ。(一) 惟フニ此問題ハ其國ニ於ケル勞働保險ノ緊切度合、工場法ノ實施狀態、衛生施設ノ現狀、並ニ工業ノ負擔程度等ニ依リテ判斷スベキ事項ニ屬シ、且ツ勞働保險ノ組織如何ニ依リテモ、多少論結ヲ異ニセザルベカラザルモノナラン。然ルニ此等ノ事項ニ關シテハ、現ニ我國ニ於テ、十分ナル材料ガ存在セザルヲ以テ、余ノ本篇ニ於テ論ズル處モ亦自ラ具體的ナル能ハザルヲ遺憾トス。余ハ此ニ外國ニ於ケル勞働保險實施ノ結果ニ鑑ミ、主トシテ保險技術上ヨリ此問題ニ對スル愚見ノ大要ヲ述ベント欲スルナリ。

參考書

圖 (一) 社會政策學會論叢第五冊勞働保險。七六—七九頁、一二〇—一二三頁、及び一三七頁

本論草稿スルに當リ、特に左ノ著述ニ負フ所多シ。

Bernhard, L. Unerwünschte Folgen der deutschen Sozialpolitik. Berlin, 1912.

Crowell, F. Social Insurance with special reference to Compulsory Health Insurance. N. Y. 1917.

Dawson, W. H. Social Insurance in Germany, London, 1912.

Dresser, F. F. Assurance of Health versus Sickness Insurance. Proceedings of the Conference on Social Insurance. Washington, 1917.

Fischer, A. Vermischte Folgen der deutschen Sozialversicherung. Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, 1913, S. 577-602.

Frankel, L. K. and Dawson M. M. Workmen's Insurance in Europe. N. Y. 1910.

Friedensburg, F. Die Praxis der deutschen Sozialversicherung, Berlin, 1911.

Gannett, L. S. Bernhard's Unerwünschte Folgen der deutschen Sozialpolitik and its Critics. Quarterly Journal of Economics, 1914, May.

Rubinow, I. M. Social Insurance. N. Y. 1913.

Schwedtmann, F. C. and Emery, J. A. Accident Prevention and Relief. N. Y. 1911.

Warren, B. S. and Sydnethriker, E. Health Insurance; its Relation to Public Health. Washington, 1916.

Webb, S. The Prevention of Destitution. London, 1911.

Woodbury, R. M. Social Insurance. N. Y. 1917.

Zahn, F. Belastung durch die deutsche Arbeitsversicherung. Zeitschrift für die gesamte Versicherungswissenschaft, 1912.

岡法學博士・工場法論(改訂増補) 大正六年

==

労働保険ハ現今多クノ國ニ於テ行ハレツ、アリ。サレド獨逸ノ労働保険制度ハ

三十年内外ノ經驗ヲ有シ、最モ可キ成績ヲ擧ゲタリト稱セラル、ヲ以テ、本論ニ於テハ主トシテ獨逸ノ制度ヲ材料トシテ引用スルコト、セリ。

獨逸勞働保險制度實施ノ結果ニツキテハ識者ノ意見必ズシモ一致セズ。一方ニ於テ Zahn, Lass, Hiltze, Kaufmann ノ如キ此制度ヲ謳歌スル者アルト同時ニ、他方ニ於テ Friedensburg, Bernhard, Faunam 等ノ如ク、此制度ニ批難ヲ加フル者アリ。然レドモ凡テノ論者ノ一致シテ勞働保險ノ一大貢獻ナリトナス點ハ此制度ガ國民ノ健康ヲ増進シ、勞働能力ヲ昂進シタルコトナリ。此事タル實ニ勞働者ノ幸福ヲ増進シ、獨逸ノ産業ヲ發達セシムルニ與テ力アルモノニシテ、勞働保險ハ此點ニ於テ測ルベカラザル貢獻ヲ獨逸ノ國民經濟並ニ勞働社會ニ齎シタルモノナリ。

今左ニ此點ニツキ簡單ニ統計的考察ヲ爲サン。

(一)先ヅ第一ニ工場ニ於ケル傷害ガ次第ニ著シク減少シタリ。(二)即チイ負傷ニ因ル死亡ガ年ト共ニ減少シ、被保險者千人ニツキ一八八七年ノ最高〇、七七人ヨリ、一九一年ノ最低〇、五九人ニ下レリ。而シテ同年ニ於ケル工場傷害保險ノ被保險者數ハ九、八四六、五九九人ナレバ(三)一九一一年ニハ一八八七年ヨリモ負傷ニ因ル死亡者ヲ一、七七三人丈ケ減少シタル譯ナリ。(四)全身癱疾ハ更ニ著シク減少シ、被保險者千人ニ

ツキ一八八七年ノ最高〇、七三人ヨリ一九一二年ノ最低率〇、三人トナレリ^(四)。即チ一九一一年ノ被保險者數ヲ基ニシテ言ヘバ、一九一二年ニハ一八八七年ヨリモ六八九五人丈ケ全身癱疾ヲ減少シタル譯ナリ。^(六)一部癱疾ハ一時増加シ、被保險者千人ニツキ一八九三年及一八九四年ニハ最高三、八二人ニ達セルガ一九〇二年度以後次第ニ減少シテ一九一二年ニハ最低二、三人ニ下レリ。即チ一九一一年ノ被保險者ヲ標準トセバ、一年ニ一四、七七五人ノ一部癱疾者ヲ減少シタル次第ナリ。^(三)一時的勞働不能ハ被保險者千人ニツキ一八八七年ノ最低〇、五三人ヨリ次第ニ増加シ、一九〇八年ニハ四、三七人ニ上リ、其以後殆ンド變化ナシ。然シナガラ、此増加ノ原因ハ傷害報告ガ精密トナリ、微傷ヲモ報告スルニ至リシニ因ルモノニシテ、實際上ノ増加ニ非ズトイフ。^(五)

然ラバ此ノ如キ傷害事故減少ノ原因如何、之レヲ工場傷害原因統計ニヨリ判斷スルニ、其原因ガ「工場主ノ責ニ歸スベキ事由」並ニ「工業固有ノ危險」ニ存スルコトヲ知ル。即チ工場主ノ責ニ歸スベキ事由ニ依ル傷害ノ總傷害ニ對スル百分比ハ一八八七年ノ二〇四七%ヨリ一九〇七年ノ一二、〇六%ニ減少シ、工業固有ノ危險ニ因ル傷害ノ百分比ハ同期間ニ於テ四四、九六%ヨリ三七、六五%ニ減少セリ^(六)。而シテ工場主

ノ責ニ歸スベキ傷害歩合ノ減少ガ主トシテ、安全器械ノ使用不完全ナル器械ノ廢止、適當ナル取締勵行ニ因ルモノナルコトハ又統計的ニ明證セラレタル所ナリ、工業固有ノ危險ニ因ル傷害歩合ノ減少モ亦工場設備ノ改良ニ負フ所大ナルベシ、

由是觀之、獨逸ニ於ケル傷害ガ勞働保險實施以來減少シ、而カモ、此減少ガ主トシテ工場主ノ傷害防止設備ヲ完全ニセルニ基クコトヲ知ルベシ。蓋シ、獨逸ニ於テハ傷害保險ノ運用ハ同業組合ニ一任セラレ、保險ニ關スル經費ノ分擔ハ各同業組合ニテ單獨ニ行ハル、ヲ以テ、同業組合員ハ傷害ノ多寡ニツキ非常ニ金錢上ノ利害關係ヲ有ス。而シテ保險法ハ此同業組合ニ對シ、傷害防止設備ニ關スル規則ヲ制定シ、施行シ、且ツ監督スル權限ヲ與ヘアルヲ以テ、同業組合ハ此制限ニ基キ職工ノ代表者ト協議シテ傷害防止規程ヲ制定シ、之レヲ各組合員ニ強制ス。若シ組合員ガ傷害防止規程ニ從ハザルトキハ一定ノ罰金ニ處シ、且ツ其保險料ヲ高クス。又職工ガ此規程ニ從ハザルトキモ一定ノ罰金ニ處ス。而シテ同業組合ニハ技師ヲ置キ、政府ノ工場監督官ノ外ニ、工場ノ検査ヲ行ヒ、傷害防止設備ニ違反スルコトナキヤ否ヤ、又ハ適當ナル改良ヲ加フル餘地ナキヤヲ注意セシム。此等ノ技師ハ高キ専門的智識ヲ有シ、傷害統計ノ示ス所ニ依リ最モ有効ナル傷害防止ノ提案ヲ爲シツ、アリ。カクテ、同業

組合ハ傷害防止規程、罰金、及ビ検査ノ三者ニ依リ常ニ其工場ノ傷害防止ヲ計リタリ。同業組合ノ工場検査、傷害防止規程ノ公布、危險ノ防止、被害者救護ニ要スル金額ハ一九一一年ニハ約二百二十萬馬、農業傷害保險等ヲ合算スルトキハ總計二百四十餘萬馬^(八)ニシテ其總支出金ノ一分三厘ニ當ル。此外、個々ノ工場ガ單獨ニ傷害防止設備ノ爲メニ費ス金ハ此十倍ニ上ルベシトイフ。獨逸ニ於ケル傷害ノ減少ハ此機關並ニ組織ノ傷害防止運動ニ基クコトハ凡テノ人ノ一致スル見解ナリ。

加之、傷害保險組合ハ應急手當所、施藥所、病院ヲ設ケ、傷害發生後直ニ必要ナル手當ヲ施スコト、セリ。若シ職工ガ此手當ヲ受クルコトヲ拒ムトキハ保險利益ヲ給與セザルカ、又ハ之レヲ減額ス。此制度ニ依リテ職工ハ些細ナル負傷ニテモ直チニ専門醫師ノ診察、治療、手術ヲ受ケ得テ其苦痛ヲ減ジ、癢疾トナルコトヲ免ル。而シテ癢疾者ノ増加ハ工場主ノ負擔ヲ増スコト大ナルヲ以テ、同業組合ニテハ應急治療ニ非常ナル努力ヲ爲シツ、アリ。負傷者中、死者重傷者ノ割合ガ年々減少シツ、アルハ大ニ此應急手當ノ行届ケルニ依ル。カクテ此設備ノ勞働能力ノ保存ニツキ貢獻セルコトノ大ナルハ等シク人ノ認ムル所ナリ。

獨逸、傷害保險ハ其被保險者ニ支拂フ年金、醫療費ガ年々著シク増加シツ、アルニ

拘ハラズ、工場主ノ負擔スル保険料ノ割合ガ多クノ事業ニ於テ次第ニ減少シツ、アリ。^(十) 一二ノ著シキ例ヲ舉グレバ、電氣機械工業ニ於テハ其保険料ハ賃銀百馬ニツキ、

一八九四年ニハ〇、八八馬ナリシモノガ、一九〇八年ニハ〇、四四馬ニ下リ、製菓業ニ於テハ一八九三年ノ一、〇三馬ヨリ一九〇八年ノ〇、五五馬ニ下レルヲ見ル。此ノ如キ保険料ノ減少ハ主トシテ傷害ノ減少ニ基クモノナリ。

此ノ如ク傷害ガ大ニ減少シ、保険料ノ負擔ガ大ニ輕減セシハ實ニ傷害防止設備並ニ醫療機關ノ完備ニ在リ。獨逸ノ傷害保險ヲ成功セシメシモノ實ニ此レニ在ルコトハ凡テノ人ノ認ムル所ナリ。

(二) 次ニ疾病保險ニツキテ之レヲ見ルニ、勞働者百人ノ一年間ノ疾病回数ハ一八八八年ニハ男子三三、五回、女子二八、八回ナリシガ次第ニ増加シテ、一九一一年ニハ男子四四、〇回、女子三八、二回トナリ、又一回ノ疾病平均期間モ同一期間ニ於テ、男子一六、六日、女子一七、七日ガ男子一八、七日、女子二三、七日ニ増加セルヲ見ル。^(十一) 又他ノ表ニ依レバ疾病ノ治療期間モ長クナレリ。^(十二) 此ノ如キハ一見勞働者ノ健康狀態ガ惡シクナリツ、アルガ如キモ、信憑スベキ筋ノ説明ニ依レバ、此増加ハ主トシテ、從來醫療ヲ充分ニ受ケ得ザリシ者ガ保險制度ノ爲ニ微恙ニテモ治療ヲ受ケ、且ツ凡テノ疾病ニ際シ

全癒スル迄治療ヲ受ケ得ラル、ニ至リシニ因ルモノナリ。^(十三) 從ツテ國民ノ健康増進上寧ロ良好ナル影響ヲ齎セリト爲ス者多シ。

今之レヲ國民死亡率ニ觀ルニ、獨逸ニテハ人口千人ニツキ一八九一年ニハ二四、七人、一九〇一年ニハ二一、八人ナリシモノガ一九一一年ニハ一八、二トナレリ。^(十四) Reichsar-

beitsblatt ハ過去十年間ノ死亡率ノ減少ハ一部ハ社會政策ニ歸セザルベカラザルベ

カラズトイヘリ。^(十五) 又一八八五年以來都市ノ死亡率ガ減少セルモ疾病保險ニ負フ所

大ナリ。^(十六) 大都市ニ於ケル肺結核死亡者ノ數ハ近年著ク減少セルモ、亦、疾病保險ノ保

健運動ノ効果大ナリトイフ。又、疾病保險組合中、著名ナルライプチツヒ疾病保險組

合ニ於テ死亡率ノ大ニ減少セルヲ見ル。若シ夫レ疾病保險ノ國民ノ體力ヲ壯健ニ

セル結果ニ至リテハ統計的ニ説明スルコト困難ナリト雖モ、獨逸勞働者ノ勞働能力

優良ニシテ、兵士ノ元氣旺盛ナルハ疾病保險制度ニ負フ所大ナルハ多クノ人ノ認ム

ル處ナリ。

蓋シ疾病保險組合ハ應急手當ヲ迅速ニシ、醫療ヲ完全ニシ、病院療養所ヲ設備シ、小冊子、講演等ノ方法ヲ以テ衛生思想ヲ鼓吹シ、一般衛生狀態ノ改良ヲ計リ、時ニハ被保險者ノ住居ヲ檢査シテ衛生上改良スベキ點ヲ指摘シ、又ハ家屋ノ消毒ヲ行ヒ、殊ニ近

年肺結核ノ防止ニツキ、非常ナル設備ヲ設ケ活動ヲ爲シツ、アリ。一般ニ肺結核防止運動ガ近年盛ントナリタルハ、疾病保險組合ニ負フ處大ナルハ、大家ノ認ムル處ナリ。^(十七)實ニ疾病保險組合ノ醫療病院等ニ費シタル金ハ、一一年ニハ一億八千八百

五十六萬馬ニシテ、疾病支給金一億六千八百九十萬馬ヲ超過シ、總支出金ノ四割八分

ヲ占ムル次第ナリ。^(十八)而シテ疾病組合ニヨリテ常時治療ヲ受クル者ハ、肺結核患者ハ

一八九七年ノ三、三三四人ヨリ、一九一一年ノ四七五七九人ニ上リ、其他ノ患者ハ同期間ニ於テ五、八八八人ヨリ三、九七九人ニ上レリ。^(十九)斯クテ疾病保險ガ勞働者ノ不幸

ヲ輕減シ、其勞働能力ヲ増進シ、且ツ疾病ノ頻出ニ依ル疾病支給金ノ負擔ヲ輕減セルコト少シトセズ。獨逸疾病保險ノ成功亦此疾病防止運動ニ負フ所大ナリ。

(三)勞働力ノ恢復、死亡率ノ減少ハ、又癩疾保險ニ負フ所多シ。蓋シ癩疾者ノ多キトキハ、癩疾保險ノ負擔大ナルヲ以テ癩疾保險局ハ病院、療養所、林間保療所、看護院、運動場、浴場、日光浴場、畸形矯正所等ヲ設ケテ十分ナル醫療ヲ施シ、且ツ建築組合ニ補助金ヲ與ヘテ家屋ヲ衛生的ナラシメ、病院ノ建設ニハ低利ノ貸付ヲ行ヒ、講演及ビ印刷物ニヨリテ衛生思想ノ涵養ニ努ム。殊ニ近時各地ニ結核檢診所ヲ設ケテ結核ノ檢診ヲ爲シ、結核療養所ヲ設ケテ重患者ヲ隔離療養セシムル等、肺結核防止ニ力ヲ注グコ

ト著シキモノアリ。カクテ癱疾保險局ニテ治療ヲ受クル者ハ肺結核患者ハ一八九七年ノ三、三七四人ヨリ一九一〇年ノ四六、七一七人ニ上リ、其他ノ患者ハ同期間ニ於テ七、一九〇人ヨリ六七、五九三人ニ上レリ。之レヲ被保險者ノ數ニ對比スルトキハ一八九七年ニハ被保險者一萬人ニツキ九人ガ醫療ヲ受ケタルニ、一九一〇年ニハ七八人ガ醫療ヲ受クルコト、ナレリ。又癱疾保險ノ疾病、癱疾防止運動ニ費セル金ハ一八九七年ニハ約二百萬馬ナリシガ一九一〇年ニハ約二千七百萬馬^(二十)トナレリ。即チ此豫防費ハ一八九七年ニハ保險掛金ノ一、六%癱疾年金額ノ三、四%ナリシモノガ一九一〇年ニハ夫レ^(二十一)一〇、七%、一二、八%トナレリ。癱疾保險ガ如何ニ治療ノ方面ニ力ヲ致セルカヲ知ルニ足ルベシ。

要之、獨逸ニ於ケル勞働保險ハ傷害、疾病、癱疾ノ豫防ニ對シ非常ナル努力ヲ爲シタルモノニシテ、之レガ爲メニ勞働者ノ苦痛貧困ヲ除キ、保險料ノ負擔ヲ節約シ、保險料ノ劇變ヲ防ギテ、保險ノ運用ヲ助ケタルコト尠シトセズ。實ニ獨逸勞働保險ヲシテ成功セシメタル大原因ハ此豫防運動ニアルコトハ多クノ識者ノ一致セル見解ナリ。

圖 (一) 獨逸帝國ニテハ疾病保險法ハ一八八四年十二月一日ヨリ、傷害保險法ハ一八八五年十月一日ヨリ老衰癱疾保險法ハ一八九一年一月一日ヨリ實施セラレタルナリ。
(二) Amtliche Nachrichten des Reichsversicherungsamts, Veler

- sicht I. XXX S. 13. (Woodbury: Social Insurance p. 145.) (三) Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich. 1913. S. 360. (四) 此減少ノ一部ハ從來全ク癱疾トセラレタル者が近來ハ一部癱疾又ハ一時勞働不能トセラルニ至レルニ因テ。 (五) Woodbury. p. 147. (六) Rubinow: Social Insurance. P. 74. (七) Die-
to. P. 75. (八) Statistisches Jahrbuch a. a. O. S. 367. (九) Dasselbe S. 363. (十) Bulletin of the
Bureau of Labor XXI. (1910). p. p. 778-783. (十一) Frankel and Dawson. p. 211. (十二) Statistisches Jahrbuch 1913. S. 22.
(十三) Fischer. S. 595. (十四) Frankel and Dawson. p. 211. (十五) Vierteljahrsheften zur Statistik des Deutschen Reichs. 1903
III. S. 16. ff. (十六) Dawson. p. 207. (十七) Statistisches Jahrbuch. S. 338. (十八) Fischer. S. 595.
(十九) Dawson p. 190. (二十) Dito. p. 187.

三

災害、疾病、癱疾、豫防設備ノ完成ガ積極的ニ保險ノ効用ヲ發揮スル上ニツキ缺クベカラザルノミナラズ、消極的ニ保險ノ弊害ヲ除去スル上ニツキ必要ナルコトナリ。吾人ハ此點ニツキテモ、先進國ノ經驗ヲ考察セザルベカラズ。

勞働保險ノ弊害トシテ、主張セラル、所多シト雖モ、本論ニ關係アル事項ヲ約述スレバ、(一)勞働保險ハ詐病者ヲ出ス。詐病者ノ數ニツキテハ議論アレド、其存在ハ否定スベカラズ。(二)微恙、微傷ノ誇張ガ可ナリ、多ク存在スルコトハ多クノ人ノ一致スル處ナリ。獨逸ニテハ古キ患者ハ新シキ患者ニ誇張方法ヲ教ヘ保險金ヲ成ルベク多

ク得ンコトヲ助クルコト甚ダ多シトイフ。(三)治療期間ヲ不當ニ長クス。治療期間ノ近年長クナリタルコトハ既ニ述ベタル處ナリ。其原因ハ一ハ完全ニ醫療ヲ施スニ在リト雖モ、又一ニハ患者ガ醫師ノ指圖ニ背キ故意ニ恢復ヲ遲延セシムルニ在ルコトハ多クノ醫師ノ一致スル處ナリ。カクテ今日外科學ノ進歩ニ拘ハラズ、保險制度實施以前ヨリモ治療ニ多クノ時間ヲ要スルナリト言フ。(一)又、故意ニ治療期間ヲ延長セズトスルモ、保險年金ヲ得ラルトノ安心ガ疾病ノ恢復ヲ遲カラシムルコトアリ。(二)

(四)年金病(Annenhysterie)トモ言フベキ患者ヲ多クス。コレハ負傷ガ輕微ナルニ拘ハラズ種々ノ神經的苦痛ヲ感ジ、遂ニ憂鬱症ニ陷ルモノナリ。此病氣ハ保險ナクバ、心身ノ緊張ニ因リテ容易ニ恢復シ得ベキニ、保險年金ヲ受ケ得ルトノ觀念ガ安心ヲ與ヘ、細微ナル症狀ニモ苦慮セシムルヨリ生ズルモノナリトイフ。(三)此種ノ神經病ノ増加ハ多クノ醫師ノ認ムル所ナリ。而シテ此種神經病ノ恢復ハ週拂ノ保險年金ヲ與フル獨逸ニ於テハ例外ナレド保險金ヲ一度ニ支拂フ國ニ於テハ原則ナリトイフ。(四)

以テ長ク年金ヲ得ントスル心理作用ガ此神經病ニ影響スル處大ナルヲ知ルベシト爲ス者アリ。此種神經病ノ多數ニ存在シ且ツ其主因ガ保險年金ニ在ルコトハ多數ノ醫學者ノ證明スル處ナレド、又反對論モアリ、未ダ定説ナラザルガ如シ。然シナガ

ラ、保險年金ガ此神經病ノ一原因タルコトハ疑ヲ容レズトイフ。又假令カ、ル神經病ノ程度ニ達セザル迄モ、患者が成ル可ク多クノ年金ヲ得ンコトヲ苦慮シ、又ハ年金ノ引下グラレンコトヲ心配シ、絶エズ精神ヲ不安ノ状態ニ置ク結果、神經ニ變調ヲ來シ、勞働不能ノ状態ニ陥ルコトアルハ多クノ醫師ノ認ムル處ナリ。(五)

此ノ如キハ實ニ勞働力ヲ弱クスルノミナラズ、又其獨立心ヲ薄クスルモノニシテ、國民經濟上決シテ望マシキコトニ非ズ。況ヤ此結果ガ保險制度ノ負擔ヲ大ニシ、正直ナル者ガ不正直ナル者ノ爲メニ餘分ノ負擔ヲ爲シ、僱主及ビ國家ハ詐欺者怠慢者ノ爲メニ費用ヲ負擔スルノ結果トナルニ於テヤ。

前記ノ如キ勞働保險ノ弊害ハ一ハ保險制度ノ缺陷ニ基クモノナリト雖モ、又一ニハ疾病傷害ノ豫防ガ未ダ十分ナラザルニ基クモノナリ。獨逸ニテハ前述ノ如ク疾病、傷害、豫防運動ニ大ナル努力ガ爲サレ居ルニ拘ハラズ、未ダ十分ナラザルコトハ屢人ノ說ク所ナリ。(六) 傷害、疾病防止設備ハ保險ノ弊害除去策トシテモ必要ナリ。

加之、若シ傷害、疾病防止策ニシテ缺陷多カランニハ、不注意又ハ故意ノ傷害ヲ多クスベシ。サナキダニ保險ニ加入セリトノ觀念ガ動モスレバ、勞働者ノ用心ヲ減殺スル恐アルニ、工場ノ設備ガ不完全ナルトキハ益傷害ヲ起シ易カルベシ。且ツ設備不

完全ナル場合ニハ故意ニ傷害ヲ起シ、之レヲ工場設備ノ不完全ニ歸シテ保險金ヲ得ントスル者ヲ生ジ易シ。是レ決シテ輕視スベキコトニアラザルベシ。

上説ノ諸弊害ハ惹キテ(イ)保險訴訟ヲ多クスル傾アリ。是レ獨逸ニ於テ屢批難セラル、處ナリ。(ロ)工場主ノ事務ヲ煩多ナラシメ、保險機關並ニ工場主ノ經費ヲ増加セシムルベシ。(ハ)保險ノ費用ヲ多クシ、國家工場主、又ビ勞働者ノ負擔ヲ大ニスベシ。尤モ勞働保險ノ諸弊害ハ或ハ醫師ノ自由選擇ヲ禁止スルコトニ依リ、或ハ監督醫官ヲ置クコトニ依リ、或ハ疾病、傷害ノ保險金ヲ賃銀ノ一部ニ止ムルコトニ依リ、或ハ勞働者ニ保險料ヲ多ク負擔セシムルコトニ依リテ幾分カ之レヲ防グコトヲ得ベシ。然レドモ此等ノ效果ハ絶對ニ非ズ。^(七)多クノ弊害ハ疾病、傷害ノ發生スルコトヨリ生ズルモノナレバ、其源ニ遡リテ疾病、傷害ノ防止設備ヲ改善スルコト根本的方法ナルベシ。

ベルンハード教授ハ獨逸勞働保險ノ弊害ヲ痛論シタル後、其結論ニ曰ク「勞働保險ハ道德上並ニ衛生上好マシカラザル結果ヲ齎シタリ。是レ初メノ内ハ避クベカラザル弊害トシテ寛容セラレタルモ、其弊害ガ次第ニ増長シタル結果遂ニ勞働保險ノ福音ヲ全然疑問ナラシムルニ至レリ」。^(八)ト同教授ノ議論ニ對シテハ種々ノ辯駁モア

リ。同教授ノ言ハ過激ニ失セルヤニ思ハルレド、勞働保險ノ運用ヲ誤ラバ其効果ヲ大ニ減殺スルノ恐アルコトハ戒メザルベカラザルコトナリ。

要之、獨逸ニ於ケル經驗ニ依レバ勞働保險ニハ弊害ヲ伴ヒ易シ。之レガ除去ハ保險制度ノ完全ト疾病、傷害防止設備ノ整備トニ待タザルベカラズ。上述スル所ニ依リ、疾病、傷害防止設備ハ、保險ノ利益ヲ發揮スル上ニ於テモ、其弊害ヲ除去スル上ニ於テ缺クベカラザルモノナルコトヲ知ルベシ。(未完)

- 圖 (一) Dittmer: Archiv für Unfallkunde, 1896, S. 177 ff. (Bernhard 五頁ヲ引用アリ) (II) Lauenstein: Beiträge zur Frage der Erwerbsunfähigkeit, 1893-94, S. 573. (Bernhard 五十五頁ヲ引用アリ) (III) Hoeche: Geisteskrankheit und Kultur, S. 25. (Bernhard 六十五頁ヲ引用アリ) (四) Schaller: 依レバ獨逸ニ於テハ治療率ハ九、三%ナルニ一回拂保險金 與アル丁株ニシテハ Wimmer: 依レバ治療率ハ九三、六%ナリ。又瑞典、瑞西ニテ一回拂保險金ヲ給與シタル後ハ治療率ナリトノコトヲ前者ニ在リテハ Billroth 後者ニ在リテハ Naegeli ン報告セリトス。(Gannet, Quarterly Journal of Economics, 1914, p. 567. Note.) (五) Gannet, p. 570. (六) Fischer a. a. O. (七) Webb, p. 186. (八) Bernhard, S. 92.